

月館町は、人々が住みやすい町、豊かな町にするため、むかしの人々がいろいろなくふうや努力をしてきました。

1. さいがいをふせぐためにかつやくした人々

(1) 高原藤兵衛

高原藤兵衛は、慶応年間に名主をつとめました。それを引退すると御幸山の中腹を開墾して桐山にするという計画の実現に力をそそぎ、その途中で亡くなった人です。もし、完成していれば、御幸山はとてもきれいな宝の山になっていたことでしょう。御幸山の杉林になっている辺りは、彼の住んでいたところの後で、南西のほうにある土盛は泉の中の島であったといわれています。テレビ中継塔への道路工事で弓の練習場はこわされましたが、今はその石垣の一部がみられます。また、ここから下る道には石垣が残っており、そのはずれには観音堂を作る予定であったという平らな土地も残されています。道の南側の平らな土地は、馬を走らせたところのあとといわれています。このように彼の屋敷あとをみるだけでも、大きさがわかります。開墾が大変な山の中に、お金をかけて桐の植林という気の長い事業にがんばった彼は、月館の開拓史のなかでも忘れられない人といえます。

(2) 古屋の亀松

上手渡の古屋地区は昔から山津波がありました。とくに約170年前の文政13年のお盆におこったものはとても大きく、三日間ふりつづいた雨のため、土砂崩れとなり、家が3軒流され、2人の人が死に、畑や水田は大きな被害をうけました。ここに住んでいた百姓の亀松は、なんとかしなければ、と考え、当時日光にいた日本でも有名な二宮尊徳に、そのひどさをうったえ、どうしたらよいかききました。それをきいた二宮尊徳は亀松の気持ちをわかってきて、植林を勧めてくれました。そのため、亀松は古屋に帰ってから植林をして、山津波をふせぎ、その後澤衛門と名前を変えて、苗木屋となりました。